

源氏物語卷別古注釈集成 第35帖若菜下 十五

國學院大學物語文学研究会

林 はやし 田 ただ 孝 たか 和 かず

(本学名誉教授)

津 つし 島 ま 昭 あき 宏 ひろ

(本学教授)

今回の補訂者

平 ひら 野 の 美 み 佳 か

(本学元講師)

津 つし 島 ま 昭 あき 宏 ひろ

(本学教授)



44、源氏、柏木に舞楽教習を依頼。御賀の試楽当日の様子 大系三卷四二二頁一四行〜四一四頁六行

大成二卷二二二頁四行、別本集成九卷四四二頁二行〜二二六頁一一行、吉沢新釈4卷113頁、全書4卷215頁、玉上評釈7卷493頁、全集4卷267頁、今泉現代語訳6卷199頁、集成5卷255頁、完訳6卷221頁・訳371頁、新大系3卷402頁、新編全集4卷277頁

源「たゞ、かくなむ。」<sup>①</sup>事そぎたるさまに、世（の）人は、あさく見るべきを。さはいへど、心<sup>②</sup>えてものせらるゝに、「さればよ」となむ、いとゞ、思ひなれ侍る。大將は、おほやけがたは、やうく大人ぶめれど、かうやうに、情びたるかたは、もとより、染まぬにやあらむ。<sup>③</sup>かの院、何事も、心及び給はぬことは、をさくなくうちにも、樂のかたのことは、御心とゞめて、いとかしこく、知り整へ給へるを、さこそ、おほし捨てたるやうなれ、しづかに聞し召しすまむ事、今しもなむ、心づかひせらるべき。かの大将と、もろともに、見入れて、舞の童への、用意・心ばへ、よく加へ給へ。物の師などいふ物は、たゞ、わが立てたる事こそあれ、いと、くちをしきものなり」

など、なつかしくのたまひつくるを、嬉しき物から、苦しく、つましくて、言少なにて、「この御前をとく立ちなむ」と思へば、例のやうに、こまやかにもあらで、やうく、すべり出でぬ。ひんがしの御殿にて、大將のつくるひい出だし給ふ樂人・舞人の装束のことなど、またく、おこなひなひ加へ給ふ。あるべきかぎり、いみじく盡くし給へるに、いとゞ、くはしき心しらひ添ふも、げに、この道は、いと深き人にぞ、物し給ふめる。

今日は、かゝる心みの日なれど、御方く、物見給はん、「見どころなくはあらせじ」とて、かの御賀の日は、赤き白つるばみに、葡萄染の下襲を着るべし、今日は、青色に、蘇芳襲。樂人三十人、けふは、白襲を着たる。辰巳のかたの釣殿につぎきたる廊を、樂所にして、山の南のそはより御前に出づるほど、仙遊霞といふもの遊びて、雪の、たゞいさゝか散るに、春の、となり近く、梅の氣色、みるかひありて、ほゝゑみたり。廂の御簾のうちに、おはしませば、式部卿の宮、右のおとゞばかり、さぶらひ給ひて、それより下の上達部は、簀の子に。わざとならぬ日のことにて、御あるじなど、けちかき程に、仕うまつりなしたり。

「たゞ、かくなむ。事そぎたるさまに、世(の)人は、あさく見るべきを。さはいへど、心えてものせらるゝに、「さればよ」となむ、いとゞ、思ひなれ侍る。」

花鳥余情

世人はあさくみるべきをさはいへと心してものせらるゝにされはよと  
なんいと、思なれ侍る 女三宮の御賀のことそきたるをくるし  
くもなきやうにかしは木の申給ふはかたうとして申すと心え給なり

一葉抄

た、かくなむことそきたるさまに 此御賀を聊介にや人のとりなさ  
むと思ふにしつかなる御願にかなふへしとあれはことそきてもくる  
しからぬにやおほすと也源氏の御詞也

弄花抄

た、かくなん 源しのことハ卑下語

細流抄

た、かくなん 何事も省略し侍るをかくいかめしきやうにとりなし  
給へればよくと、のへたきと也

されはよと されはこそ世間には此御賀をことくしくいひなすよ  
とおほす也

孟津抄

た、かくなん 源の卑下の語  
世の人はあさくみるべきを 女三の御賀のことそきたるをくるしくも

なきやうに柏の申給はかたうとして申と心得給也\*

されはよとなんいと、思ひなされ侍る 御賀のことを世にはこと

くしく申よとなれば源返答也女三の方にことそきたるを不苦と  
夕霧の給をた、最貞にていふと源詞也

岷江入楚

た、かくなんことそきたるさまに世ノ人はあさくみるべきをさはいへ  
と心えてものせらるゝにされはよと思ひなれ侍る 弄た、かくな

んは源氏の詞卑下ノ語

必何事も省略し侍るをかくいかめしきやうにとりなし給へればよく  
と、のへたきと也

必されはよとはされはこそ世間には此御賀をことくしくいひなす  
事とおほすなり

箋当日を省略したりと人のとはん也兼てことくしく人のおもふへ  
き故也然は柏木の事そけとあるもさては柏木もさやうにことくし  
くおほすかと也

花女三宮の御賀のことそきたるをくるしくもなきやうに柏木の申給  
ふはかたうどして申と心え給ふ也

私花鳥の義いか、た、かくなんとは柏木の申給ふやうに源もおほし  
て事そきたる用意なるを兼て人のことくしく思へき故に案に相違

して事外省略し給へはよとあさくみるべきと也さはいへと心えてと  
は柏木は省略したるはよからんと心えられたる其処は源と同心なか

らことかげと柏の申さるゝはさては柏もことくしき用意ならんとは思ひ給ふよきては世の人思はん所はいよく一定なり省略の用意にせましき物をと今おもはるゝとの源の詞とみえたり

湖月抄

ただかくなんことそきたるさまに 源氏の詞卑下の語。同。愚

案 朱雀院の御賀をかやうに省略し給ふを、世の人はあさくも見るべきを、柏木はさはいへどいかめしきよりことそきたるがまさるべきと、朱雀の御ありさまをよく心得て申さるるに、源氏もさればよといよいよおもひなりて、柏木と同心なると也。是は彼御賀の大營をわざと卑下して、省略するやうにいひなし給へる詞也。

【孟源の卑下の詞也】  
『ただかくなんことそきたるさま』

案のこく柏木も源と同心との心也  
さればよとなん、いとどおもひなられ侍る。

源氏物語新釈

源の卑下の詞也  
た、かくなんことそきたる 是は柏の卑下して右のことくいひなさ

れしを受けて、源も又さる心してのたまふ也、下にみゆる御賀のさま

こまかにはか、ねと、ことそき給ふとも見えねは、爰はことよくい

ひ給ふなること知へし

されはよとなん 案のことく柏木も源と同心かとの心也

② 大將は、おほやけがたは、やうく大人ぶめれど、

岷江入楚

大將はおほや・かたは 源の詞

朝儀奉公の心は夕霧はやうく熟したると也

湖月抄

大將は、おほやけがたは、やうやうおとなぶめれど、

源氏物語新釈

おほやけかたは 奉公の道は也

③ かうやうに、情びたるかたは、

孟津抄

かうやうになさけひたるかたは 夕は遊の方はをろかなる也

湖月抄

舞臺の事也  
かやうに

源氏物語新釈

かうやうに 舞臺の事

④ もとより、染まぬ

岷江入楚

もとよりしまぬ 心にそまぬ事也

⑤ かの院、何事も、

弄花抄

かの院 朱雀院

細流抄

かの院 朱雀院也

孟津抄

かの院 朱也

岷江入楚

かの院何事も 必朱雀院也弄

心をよひ給はぬ諸芸に通し給へりと也<sup>(3)</sup>

湖月抄

〔通〕朱雀院抄、諸業に通し給へりと也  
かの院、何事も

源氏物語新釈

かの院 朱さく

なに事も 諸の藝

樂のかたのことは、御心とめて、

孟津抄

かくのかたは御心とめて 朱のよくあそはず也

岷江入楚

かくのかたのことは 朱雀別して樂道をこのみ給ふと也

湖月抄

〔抄〕朱雀別して樂道を好み給ふと也  
かくのかたのことは

さこそ、おぼし捨てたるやうなれ、

岷江入楚

覚しすてたるやうなれと 朱雀世をすて給へれとも樂道などは忘れ<sup>(5)</sup>

給ましきと也

湖月抄

朱の御出家のち評樂を也  
さこそおほしすてたるやうなれ

今しもなむ、心づかひせらるべき。

湖月抄

朱の今の御出には猶ほつかしき也  
いましもなん心づかひせらるべき。

かの大将と、もろともに、

孟津抄

かの大将ともろともに 夕霧也

岷江入楚

かの大将ともろともに 夕霧と柏木ともろともに也

湖月抄

夕霧と柏木ともろと也  
かの大将ともろ共に

源氏物語新釈

かの大将 夕きり

物の師などいふ物は、たゞ、わが立てたる

一葉抄

物の師 道のならひハかりは優なることはなき物そと也

孟津抄

もの、師など 地下の者などはくるしくはなき物と也

岷江入楚

物のしといふ物はた、わかたてたる 地下伶人などはた、公役など

のやうにしてなにも用意心つかひのなき物そと也

湖月抄

物の師 <sup>⑪</sup> 道のものは我流ばかりをしへて優なることはなき物ぞと也。<sup>⑫</sup> 地下の伶人などは只公役などのやうにして心つかひのなきぞと也。

源氏物語新釈

物の師 いて物の師といふものは、我流ばかりをいひてみやひたる心つかひはなしと也

嬉しきものから

岷江入楚

うれしき物から 柏の心也源の隔心なき躰を思ふ也源の心もちは妙也

湖月抄

〔抄〕柏木の心也源の隔心なき躰は也  
うれしきものから、

源氏物語新釈

うれしき物から 柏の言少なにて、<sup>⑫</sup>

孟津抄

ことすくなにて 源の御前を柏のとく立給也  
「この御前を、とく立ちなむ」<sup>⑬</sup>

湖月抄

源の御前を柏木のとく立ち給ふと也  
此まへをとくたちなん

源氏物語新釈

このおまへを 源の御まへやうく、すべり出でぬ。<sup>⑭</sup>

孟津抄

やうくすへり出ぬ 柏也

湖月抄

すへり出でぬ。孟津也  
ひんがしの御殿にて、大將の

一葉抄

ひんかしのおと、にて 花散里の方也

弄花抄

ひんかしのおと、にて 花ちる里方

孟津抄

東のたいのおと、にて大將の 花散より夕の出給也

岷江入楚

ひんかしのおと、 弄花散里のかた

湖月抄

花散里の方也  
ひんがしのおとど

源氏物語新釈

ひんかしのおと、にて 花散さと  
樂人・舞人の装束のことなど、またく、おこなひ加へ給ふ。<sup>⑮</sup>

一葉抄

又く 柏木のおこなひくはへ給

弄花抄

おこなひくハへ かしハ木のおこなひくハへたまふ

孟津抄

楽人まひ人のさうそくことなと又くをこなひくはへ玉ふ 柏の悉  
意見ある也

岷江入楚

又々をこなひくはへ 柏木のをこなひくはへ給ふ也

夕霧の随分と、のへ給へる所へ柏木のおはして猶事ともしそへ給と  
也楽道には源の、給へるやうよく達したる人そと也

湖月抄

又又おこなひくはへ給ふ。  
〔註〕柏木のごとく遊見あるなり

源氏物語新釈

又くおこなひ 柏木

いみじく盡くし給へるに、<sup>17)</sup>

湖月抄

いみじくつくし給へるに、  
〔抄〕夕霧の随分調へ給ふ所へ柏の猶事へ給ふ也

源氏物語新釈

いみしくつくし給へる 夕きり

心しらひ<sup>18)</sup>

源氏物語新釈

心しらひ 有意の字を訓

げに、この道は、いと深き人にぞ、物し給ふ<sup>19)</sup>

一葉抄

けに此みちは まへに源氏の御詞にも又誰にかハと思ひめぐらし給  
とありけにすぐれ給へりと也双昏詞也

孟津抄

孟津抄

けに此みちはいとふかき人にそものし玉ふ 柏也

岷江入楚

いとふかき人にぞ 柏木の楽道をほめていへり

湖月抄

けに此道はいとふかき人にぞ 柏也。まへに源氏の御詞にも、  
又誰にかはとおもひめぐらし給ふとあり。げにすぐれたまへりと也。

双紙詞也。

源氏物語新釈

けにこのみちはいとふかき人にぞ 或人云 まへに源氏の御詞に又  
誰にかはとおもひめぐらし給ふとあるをうけて、けにすぐれたまへ  
りとは書り

御方く、物見給はんに、<sup>20)</sup>

岷江入楚

御かたく物み給はんに 試案の日なれと明石女御女三宮紫上以

岷江入楚

御かたく物み給はんに 試案の日なれと明石女御女三宮紫上以



上いつれも御見物なればけふはいよ／＼まひのさうそくをもよく  
と、のへらるゝと也

### 湖月抄

紫上明石御なるべし  
御かたがたものみ給はんに

### 源氏物語新釈

御かた／＼も 紫上明石女御など

かの御賀の日は、赤き白つるばみに、葡萄染の下襲を着るべし、  
今日は、青色に、蘇芳襲。樂人三十人、けふは、白襲を着たる。  
辰巳のかたの釣殿につゞきたる廊を、樂所にして、山の南のそば  
より御前に出づるほど、仙遊霞といふもの遊びて、雪の、たゞいさ、  
か散るに、春の、となり近く、梅の氣色、みるかひありて、ほ、  
ゑみたり。

### 紫明抄

かく人三十人けふはしらかさねをきたるたつみのかたのつりとのに  
つゞきたる廊をかく所にして山のみなみのそはよりま御前にいつるほ  
と仙遊霞といふ物あそひて雪のた、いさ、かちるに 三十仙人誰得  
アラソウ 調含先殿扇管絃聲 古集詩章孝標  
春のとなりちかくむめのけしき見るかひありてほ、ゑみたり 冬な  
から春のとなりのちかければ中かきよりそ花はちりける

### 河海抄

かの御賀の日はあかきしらつるはみにえひそめのしたかさねをさるへ

し今日はあをいろにすわうかさね 赤白椽 葡萄染下襲 青色

舞臺舞

かく人卅人けふはしらかさねをきたり 三十仙人誰得レ聽含元殿角

管絃聲章孝標

仙遊霞と云物あそひて 仙遊霞 小曲海部印子十無舞古曲

春のとなりちかくむめの氣色みるかひ有てほ、ゑみたり 古今深養

父冬ながら春の隣のちかければ中かきよりそ花はちりける

匂はねとほ、はえむ梅の花をこそ我もをかしと折てなかわれ

### 花鳥余情

かの御賀の日はあかきしらつるはみにえひそめの下かさね 承平七

年陽成院七十賀舞重五人服赤白椽袍蒲陶染下襲

### 一葉抄

あかきしらつるはミ 藤のうらはの巻にミゆ

仙遊霞 河大食調曲無舞フシカミ（赤ハ赤青ハ青共につるはミハ不入云々未決

之義也）

春のとなりちかく 河冬ながら春のとなりのちかければ中かきより

そ花はちりける 是ハ雪をよめる哥也いさ、かうちゝるといひて春

のとなりといへる比哥を心に持たるへし

### 弄花抄

けふハあを色にすハうかさね樂人廿人 けふハしらかさねをきたる

樂人舞人の義坎

仙遊哥と云物 ※項目のみ。

孟津抄

かの御賀の日はあかきしらつるはみにえひ 色々のむつかしきこと

をいへとも其地をみたす也一段晴なれば也

花承平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白椽袍蒲萄染下襲

けふはあを色にすはうかさね楽人三十人はけふはしらかさねをきた

る 青色麴塵也 蘇芳

三十仙人誰得聴 含元殿角管絃色

楽人舞人の義坎

仙遊霞といふ物あそひに 河仙霞 大食調曲拍子無舞 古楽小曲 南宮横笛譜為性調曲

春のとなりちかく梅の気色みるかひ有てほ、ゑみたり 冬なから春

のとなりのちかけれはなか、きよりそはなはちりける

にははねとほ、ゑむ梅の花をこそわれもをかしと折てなかわれ

岷江入楚

かの御賀の日は 当日のさうそくを今日かねていふ也

あかきしらつるはみにえひ(じ)そめの下かさね 河赤白椽 蒲萄染下襲

花承平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白椽蒲萄染下襲

けふはあをいろにすはうかさね 河青色 麴塵也 蘇芳重

かく所ツにして ※項目のみ。

仙遊霞といふ物 (此楽一此楽二)院にておはすれは仙洞ノ心ニ此樂アリ

河仙遊霞大食調曲 拍子十無舞古楽小曲南宮横譜為性調曲

雪のた、いさ、かちるに春のとなりちかく梅のけしきみるかひありて  
ほ、ゑみたり 冬なから春の隣(せ)のちかけれは中かきよりそ花はちり

ける

にははねとほ、ゑむ梅の花をこそわれも(む)をかしと折てなかわれ

私春のとなりの哥をよめり

湖月抄

かの御賀の日は、あかきしらつるばみに、  
正日に出世抄音の表取ぞ今案ていふ也

あかきしらつるばみ 藤の裏葉の巻に見ゆ。承平七年陽成院七十

賀二舞童五人服二赤白椽袍蒲萄染下襲一也。  
マイワフ、フクヌアカキシラフルヘミノハウエハウモツシタカササ

けふはあをいろにすはうかさね、  
試案の日出世抄青色麴塵 【徳】舞童の指也

仙遊霞 大食調曲、無舞。院にておはせば仙洞の心に此樂あり。

春のとなりちかく 古「冬ながら春のとなりの近ければ、中がきよ

りも花はちりける」、是は雪をよめる歌也。いささかうちちると云

ひて、春のとなりのといへる、此歌をころに持ちたるべし。

源氏物語新釈

かの御賀の日は 正日には也

あかきしらつるはみに 承平七年陽成院七十賀二舞童五人服二赤白

椽ツルハシ袍蒲萄染下襲一

かく所ツ ところとも

仙遊霞 或説云 院にておはせば仙洞の心に此樂あり且此曲には舞

はなしといへり

廂の御簾のうちに、おはしませば、<sup>22</sup>

岷江入楚

ひさしのみすのうちにおはしませは 〔廂〕 庇の簾中に源氏おはするに式  
部卿宮紫上父右のおと、鬚黒などはかり居給也大納言以下はすのこ  
にゐて

湖月抄

おはしませば、  
〔源の世〕

源氏物語新釈

おはしませは 源

式部卿の宮、<sup>23</sup>

一葉抄

式部卿宮 紫上の父宮也

湖月抄

〔圖〕紫上の父宮也  
式部卿の宮、

源氏物語新釈

式部卿宮 紫上父

右のおと、<sup>24</sup>

一葉抄

右のおと、 ひけくろ

弄花抄

右のおと、 ひけくろ

湖月抄

右のおとど  
〔五〕ひけくろ

源氏物語新釈

右のおと、 鬚黒

御あるじなど、<sup>25</sup>

岷江入楚

御あるじなど 饗応也

湖月抄

御あるじなど  
〔抄〕饗應也

源氏物語新釈

御あるし 饗

けぢかき程に、<sup>26</sup>

湖月抄

けぢかきほどに  
〔結〕情ならぬ心

源氏物語新釈

けちかきほどに こはわさとある正日ならねは饗もことくし

からすし給ふ也

## 44、補足資料

### 〈1〉 ⑱

『源氏物語』「若菜下」大系(3) 411頁

御質などいへば、ことごとくしきやうなれど、家に生ひ出づる童べの、  
かず多くなりけるを、「御覽せさせむ」とて、舞など習はし始めし、「そ  
の<sup>〔源氏〕</sup>ことをだに、はたさむ」とて、拍子と、のへんこと、「又、誰にかは」  
と、おもひめぐらしかねてなん、月頃とぶらひ物したまはぬ恨みも、捨  
て、ける」

と、の給ふ御氣色の、うらなきやうなるものから、いとく、恥づかしき  
に、「顔の色、たがふらん」とおぼえて、御いらへも、とみにえ聞えず。

### 〈2〉 ㉑

『和漢朗詠集』卷下禁中、五二三番、大系 183頁

三十の仙人は誰か聴くことを得たる 含元殿の角の管絃の聲 章孝標  
三十仙人誰得聽 含元殿角管絃聲 章孝標

### 〈3〉 ㉒

『教訓抄』六、群書類従第19輯上管絃部 283頁

仙遊霞。拍子十又拍子九。又仙人河云。又仙神歌云。

新樂

此樂齋宮拜行之時。勢多橋上ニテ。樂人參向之時奏此曲。一。二返吹  
之様云説アリ。今世不<sup>レ</sup>要。拍子十二ニナル也。此説モアシクモ侍ス。忠拍

子説アリ。此曲有<sup>二</sup>三説<sup>一</sup>也。作者未<sup>レ</sup>勘出<sup>レ</sup>之。

※『河海抄』の引用注記の出典未詳。参考までに『教訓抄』を掲げる。

### 〈4〉 ㉓

『古今集』卷十九雜體、一〇二二番歌、大系 315頁

あす、はるた、んとしける日、となりの家のかたよ  
り風の雪をふきこしけるをみて、そのとなりへよみ  
てつかはしける 清原ふかやぶ

冬ながら春のとなりのちかければ なかがきよりぞ花はちりける

### 〈5〉 ㉔

『好忠集』二六番歌、大系 47頁

にははねどほを笑む梅の花をこそわれもかして折りてながむれ

### 〈6〉 ㉕

『日本紀略』後篇二、承平七年十二月十一日、国史大系第11卷 37頁

十一日庚寅。兵部卿元良親王奉<sup>レ</sup>賀<sup>二</sup>陽成院七十御筭<sup>一</sup>。

(補訂者、平野美佳、令和五年十二月)

45、貴頭の子弟、見事な舞を披露。源氏、柏木に皮肉を言う。 大系三卷四一四六行

大成二卷二二二六頁二行〜二二二八頁二行、別本集成九卷四四八頁五行、吉沢新釈4卷115頁、全書4卷217頁、玉上評釈7卷497頁、全集4卷269頁、今泉現代語訳6卷200頁、集成5卷257頁、完訳6卷223頁・訳372頁、新大系3卷403頁、新編全集4卷279頁

右の大殿の四郎君、大將殿(の)三郎君、兵部卿の宮の孫王の君たち二人は、萬歳樂。まだ、いと小さき程にて、いと、らうたげなり。  
四人ながら、いづれとなく、高き家の子にて、かたちをかしげに、かしづき出でたる、おもひなしも、やむごとなし。又、大將の、御内侍のすけ腹の二郎君、式部卿の宮の兵衛(の)督といひし、今は源中納言の御子、皇饗。右のおほい殿の三郎君、陵王。大將殿の太郎落躰。さては太平樂・喜春樂などいふ舞どもをなむ、おなじ御なからひの君たち、大人たちなど、舞ひける。暮れゆけば、御簾あげさせ給ひて、物の興まさるに、いと美しき御孫の君たちの、かたち・姿にて、舞のさまも、世に見えぬ手をつくして、おほむ師ども、おのく、手のかぎりを、をしへ聞えけるに、ふかきかどくしさを加へて、めづらかに舞ひ給ふを、いづれをも、「いとらうたし」とおぼす。老い給へる上達部たちは、みな、涙おとし給ふ。式部卿の宮も、御孫をおぼして、御鼻の色づくまで、しはたれ給ふ。あるじの院、源「すぐる齡にそへて、酔ひ泣きこそ、とゞめ難きわざなりけれ。衛門(の)督、心とゞめてほ、笑まる、いと、心恥づかしや。さりとも、今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり」  
とて、うち見やり給ふに、人よりけに、まめだち屈して、まことに、心ちも、いと惱ましければ、いみじき事も、目もとまらぬ心地する、人をしも、さしわきて、空酔ひをしつ、かくの給ふ、たはぶれのやうなれど、いと胸つぶれて、盃のめぐりくるも、頭いたくおぼゆれば、けしき許にて紛らはすを、御覽じ咎めて、もたせながら、たびく強ひ給へば、はしたなくて、もて煩ふさま、なべての人に似ず、をかし。

① 右の大殿の四郎君、

孟津抄

右の大との、四郎君 髯也

岷江入楚

湖月抄

右の大殿の四郎君、

源氏物語新釈

右の大殿の四郎君 (髯) 鬚黒子玉かつら腹系図ニ右弁

右の大殿の四郎君　ひけ黒の子玉かつら腹

大將殿②(の)三郎君、

孟津抄

大將殿の三郎君　夕也

岷江入楚

大將殿の三郎君　夕霧子雲井雁腹系図ニ右大弁

湖月抄

大將殿の三郎君、  
夕霧子雲井雁腹系図ニ右大弁

源氏物語新釈

大將殿　夕

三らう君　雲井腹

兵部卿の宮の孫王の君たち二人は、

河海抄

兵部卿宮のそむわう　五世までは孫上といふ也

一葉抄

兵部卿宮の孫王　螢の宮の御子也孫王とハ帝王の御むまこ也

弄花抄

兵部卿の宮　螢

細流抄

兵部卿宮　螢也

孟津抄

兵部卿宮のそんわうの君たちふたりは　螢也　五世までは孫王とい

ふ也

岷江入楚

兵部卿宮のそんわうの君たち二人　螢宮也二人は螢の御子系図ニハ

いづれも童宮とあり御母みえす

河五世までは孫王といふ

湖月抄

兵部卿ノ宮のそんわうの君たちふたりは  
孫王は帝王の御也之五世までは孫上也也

源氏物語新釈

兵部卿宮　螢

そむわうの君たち　孫王

かしづき出でたる、

源氏物語新釈

かしづき出たる　こは常のかしづきにはあらで舞童をはかしづきの

人あまたして出て立るをいふなるへし

又、大將の、御内侍のすけ腹の二郎君、

孟津抄

又大將の内侍のすけはらの二郎君　夕の子也

岷江入楚

大將のないしのすけはらの二郎君　夕霧ノ二男母藤曲侍系図ニ中納

言トアリ

湖月抄

〔五〕夕霧の子也  
二郎きみ、

源氏物語新釈

又大將の 夕霧

式部卿の宮の兵衛⑤(の) 督といひし、今は源中納言の御子、皇躰。

弄花抄

源中納言の子 式部卿宮の御孫也

細流抄

式部卿 紫上の父

孟津抄

源中納言の子 式部卿宮の御孫也

岷江入楚

式部卿宮の兵衛督といひし今は源中納言の御子 式部卿宮紫上 兵

〔高〕  
衛督式部卿御子の子母みえす系図ニ若君トアリ

湖月抄

紫上の父宮也  
式部卿の宮の兵衛のかみ

今は源中納言の御子皇躰 皇躰、陵王、落躰、太平樂 喜春樂みな

舞樂の名なり。

源氏物語新釈

式部卿の宮 紫父宮

わうせう 皇躰

右のおほい殿の三郎君、

岷江入楚

右の大いと、三郎君 髻黒ノ三男母玉鬘 尚侍系図右兵衛督トアリ

湖月抄

〔五〕  
右のおほいとこの三郎君

陵王。

源氏物語新釈

れうわう 陵王

大將殿の太郎、

岷江入楚

大將殿の太郎君 夕霧の嫡男母・居雁系図ニ右衛門督トアリ

湖月抄

〔五〕  
大將殿の太郎君

源氏物語新釈

大將殿 夕

落躰。

源氏物語新釈

らくそむ 落躰

喜春樂

源氏物語新釈

喜春樂 きすんらく

御孫の君たち<sup>⑫</sup>

弄花抄

御むまこの 孫達の舞を感じ給也

細流抄

御まこ 皇鹿章<sup>鹿</sup>を舞人也

孟津抄

御むまこの君達 孫達の舞を感じ給ふ也

岷江入楚

御むまこの君たち 弄孫達の舞を感じ給ふ

湖月抄

御うまこの君たち<sup>源の孫達の舞を感じ給ふ也(傳)</sup>

源氏物語新釈

御うまこの君 源の

ふかきかどくしさを加へて、<sup>⑬</sup>

岷江入楚

ふかきかどくしさを 余剰<sup>(也)</sup>などの事歟夕霧柏木などの後見も有へし

湖月抄

ふかきかどくしさをくはへて

見もあるべし。

源氏物語新釈

ふかきかどくしさをくわへて 或説に夕柏などのとりなしに餘情

の有をいふなるへし

老い給へる<sup>⑭</sup>

源氏物語新釈

おいたまへる 老

式部卿の宮も、<sup>⑮</sup>

湖月抄

式部卿のみやも、<sup>平上の父(臣)</sup>

御孫をおほして、<sup>⑯</sup>

一葉抄

御むまこをおほして むまこの舞を感じ給也

岷江入楚

御まこをおほして 必皇璽をまふ人也

湖月抄

御うまごを 皇璽<sup>⑰</sup>を舞ふ人也。 御うまこの舞を感じ給ふ也。<sup>⑱</sup>

源氏物語新釈

御うまごを 皇璽を舞

あるじの院、「すぐる齡にそへて、酔ひ泣きこそ、とゞめ難きわ

ざなりけれ。衛門(の)督、心とゞめてほ、笑まるゝ、いと、心

恥づかしや。さりとも、今しばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。

老いは、えのがれぬわざなり」とて、



紫明抄

あるしの院すくるよはひにそへてはゑひなきこそと、めかたきわさな  
りけれ衛門督心頼末と、めては、ゑまる、いと心はつかしやさりともいま  
しはしならんさかさまにゆかぬとし月よ さかさま1にとしもゆかな  
んとりもあへすすくるよはひやともにかへると 古今

河海抄

ゑひなきこそ 萬葉三2かしこしといふものよりも酒のみてゑひなき  
するそましてあるらし

③ 同世中のあそひのみにましらは、ゑひなきするにありぬなるへし  
④ 同た、にゐてかたらひするは酒のみてゑひなきするに猶しかすなり  
さかさまにゆかぬとしつきよおいはのかれぬわさなりとて さかさ古今  
まに年もゆかなんとりもあへす過くる月日齡やともにかへると

一葉抄

いましハしならん 老行は程なき物をと也

弄花抄

あるしの院 源氏

衛門督心と、めて かしハ木ほ、ゑむ也

いましハしなん かしは木もやかて老なんと也

細流抄

衛門督心と、めて すこし心ありての給也

孟津抄

あるしの院すくるよはひにそへてはゑひなきこそと、めかたきわさな  
りけれ 源也

かしこしといふ物よりも酒のみてゑひなきするそましてあるらし  
世中のあそひのみにましらは、ゑひなきするとあかぬへからし  
た、にゐてかたらひするは酒のみてゑひなきするに猶しかすけり  
源の小兒たちをみて感涙也

衛門督心と、めて 柏也 源のこれにとりか、りて也

今しはしならんさかさまにゆかぬ年月よ老はのかれぬわさなりとて

さかさまに年もゆかなん取もあへすすくるよはひやともにかへると

柏もやかて老なんと也

岷江入楚

あるしの院 弄源氏也

ゑひなきこそ 河かしこしといふ物よりも酒のみてゑひなきするそ  
まして有らん世中のあそひの道にましらは、ゑひなきするにありぬ  
なるへした、にゐてかたらひするは酒のみてゑひなきするに猶しか  
すけり

聞いにしへの七の賢人もた、ほりする物はさげにし有らし

私諸抄引哥ヲのせずニ亦事次記之耳

衛門督心と、めて 柏木ほ、ゑむ也

必ずこし心ありての給ふ也

羨ほ、ゑむ心もなき人をさしてわさとの給ふ也末にめもとまらぬ人

をしもとあり

いましはしならん 弄柏木もやかて老なんと也

さかさまにゆかぬ年月よ さかさまに年もゆかなんとりもあへす過

るよはひやともにかへると

私不及引哥

### 湖月抄

〔孟源也〕  
あるじの院、

〔孟源の小進を見て感涙也〕  
ゑひなきこそと

衛門のかみ心とどめてほほゑまるる 〔細〕すこし心ありてのたまふ

也。〔三〕ほほゑむ心もなき人を指して態のたまふ也。末に目もたま

らぬ人をしもとあり。

老に行は程なきものと也  
いましはしならん。

さかさまにゆかぬとし月よ 〔孟古〕さかさまに年もゆかなんとりも

あへず、過るよはひやともにかへると。』

『孟柏もやかて老なんと也  
おいはえのがれぬわざなり』とて、

### 源氏物語新釈

いましはしなん 老行程なき物をと也

さかさまにゆかぬ年月よ 〔八九六〕古さかさまに年もゆかなんとりもあへす

過るよはひやともにかへると

心と、めてほゑまるゑ、 わさとのたまへり、其様次にみゆ

<sup>⑧</sup>人よりけに、まめだち屈して、

### 孟津抄

人よりけにまめたちつくして 源の柏をみ玉ふ目をみて柏のおそろ

しと思はれてやかて病玉ふ也

花鳥には衛門督嫡子の子と云々

### 岷江入楚

人よりけにまめたちつくして 生得柏木は実々しき人なるに底深く 〔〇〕

隔心の事あり又所労もあしくて舞楽の面白さも心もとまらずして居

給ふ人に源のかく打あてゝの給ふ也

### 湖月抄

人よりけにまめだちつくして 〔孟〕源の柏木を見給ふ目を見て、柏

木のおそろしく思ひて、やがて病み給ふ也。

柏のまほ  
人よりけにまめだちつくして、

### 源氏物語新釈

人よりけに 柏のさま

<sup>⑨</sup>空酔ひをしつゝ、かくの給ふ、

### 弄花抄

そらゑいをして 源しそら酔也

### 孟津抄

そらゑいをしてかくの給ふ 源の空酔也

### 岷江入楚

そらゑいをして 源のそら酔也

源の酔たるさまをして也かくの給はんため也

湖月抄

「必酒のみ給はぬ也」  
そらゑひ

源氏物語新釈

そらゑひ 源の

<sup>23)</sup>いと、胸つぶれて、

岷江入楚

いと、むねつぶれて

つふる、也

湖月抄

いとどむねつぶれて

抄 柏木の心に恐怖するうへに、かくのたまへば、いとどむねつぶるる也。

柏の也  
いとどむねつぶれて、

源氏物語新釈

いと、むねつぶれて

<sup>24)</sup>けしき許にて

細流抄

けしきはかりにて

岷江入楚

けしきはかりにて

湖月抄

必酒をものみ給はぬ也

※項目のみ。

「必酒をものみ給はぬ也」  
気色ばかりにて

源氏物語新釈

けしきはかりにて

<sup>25)</sup>御覽じ咎めて、

岷江入楚

御らんしとかめて

湖月抄

「必酒のみ給はぬ也」  
御らんじとがめて

<sup>26)</sup>もたせながら、

湖月抄

「柏木に盃をもたせながら」  
もたせながら

源氏物語新釈

もたせながら

<sup>27)</sup>はしたなくて、

湖月抄

「柏のをま也」  
はしたなくて、

<sup>28)</sup>もて煩ふさま、

一葉抄

もてわづらふさま

湖月抄

もてわづらふさま

柏木に盃を

何事も人にすぐれたるよういの人也

抄 柏木のさまをほめたり、何事も人にすぐれた

るよういの人なり。

なべての人に似ず、

岷江入楚

なへての人ににす

柏木のさまをほめたる也

## 45、補足資料

〈1〉 ⑱

『古今集』巻第十七雑歌上、八九六番歌、大系 282頁

さかさまに年もゆかなん とりもあへずするよはひやともにかへると

『万葉集』巻第三、三四七番歌、大系 177頁

世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣するにあるべからし

〈4〉 ⑱

〈2〉 ⑱

『万葉集』巻第三、三四一番歌、大系 177頁

賢しき物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし

『万葉集』巻第三、三五〇番歌、大系 179頁

默然をりて賢しらすは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり

〈3〉 ⑱

(補訂者、平野美佳、令和五年十二月)

## 46、源氏に恐懼する柏木、病みて死を悟り、女二の宮のもとを離れる 大系三卷四一五頁一一行〜四一七頁一六行

大成二卷二二一八頁二行〜二二二〇頁五行、別本集成九卷四五六頁二行、吉沢新釈4卷17頁、全書4卷218頁、玉上評釈7卷500頁、全集4卷271頁、今泉現代語訳6卷201頁、集成5卷259頁、完訳6卷224頁・訳373頁、新大系3卷405頁、新編全集4卷281頁

心地かき亂りて、堪へがたければ、まだ、ことも果てぬに、<sup>①</sup>まかで給ひぬるまゝに、いといたく惑ひて、「例の、いと、おどろくしき酔ひにもあらぬを、いかなれば、かゝるならむ。」<sup>②</sup>つゝ、まし』と、物を思ひつるに、氣の上りぬるにや、いと、さいふばかり臆すべき心弱さとおほえぬを。いふかひなくもありけるかな」と、身づから、思ひ知らる。しばしの酔ひの惑ひにもあらざりけり。やがて、いといたく患ひ給ふ。おとゞ、は、北の方、おほしさわぎで、「よそ〜にて、いと、おほつかなし」とて、殿にわたしたてまつり給ふを、女宮のおぼしたるさま、また、いと心苦し。ことなくて過ぐすべきころは、心のどかにあいな頼みして、いとしもあらぬ御心ざしなれど、「今は」と、

別れたてまつるべき門出にや」と思ふは、あはれに悲しく、おくれておほし嘆かむ事の、かたじけなきを、「いみじ」と思ふ。母御息所も、いと いみじく嘆き給ひて、

御息<sup>⑩</sup>世のこととして、親をば、猶、さる物におきたてまつりて、かゝる御なからひは、とある折も、(かゝるをりも) 離れ給はぬこそ、例<sup>⑪</sup>のことなれ。かく、ひき別れて、平らかに物したまふまでも、過ぐし給はんが、心づくしなるべきことを。しばし、こゝにて、かくて心み給へ」

と、御かたはらに、御几帳ばかりを隔て、見たてまつり給ふ。

柏<sup>⑫</sup>ことわりや。數ならぬ身にて、およびがたき御中らひの、なまじひに許されたてまつりてさぶらふしるしには、「長く世に侍りて、かひなき身の程も、すこし、人と等しくなるけぢめをもや、御覽ぜらるゝ」とこそ、思う給へつれ。いと いみじく、かくさへなり侍れば、「深き心ざしをだに、御覽じ果てられずやなり侍りなむ」と、思う給ふるになむ、とまりがたき心地にも、え行きやるまじく思ひ給へらるゝ、」

など、かたみに泣き給ひて、とみにも、えわたり給はねば、又、母北の方、うしろめたく思して、

母「などか、「まづ見えむ」とは、思ひ給ふまじき。われは、心ちも、すこし例ならず、心細き時は、あまたの中に、まづ、とり分きて、ゆかしくも頼もしくもこそ、おほえ給へ。かく、いと、おぼつかなきこと」

と、うらみ聞え給ふも、又、いと、ことわりなり。

柏「人より先なりけるけぢめにや、とりわきて、思ひならひたるを。今に、猶かなしくし給ひて、しばしも見えぬをば、苦しき物にし給へば、心ちの、かく限りにおほゆる折しも、見えたてまつらざらむ、罪深く、いぶせかるべし。「今は」と、頼みなく聞かせ給はゞ、いとしのびてわたり給ひて、御覽ぜよ。かならず、又、對面賜はらむ。あやしく、たゆく、おろかなる本性にて、事に觸れて、おろかにおほざる、事も、ありつらんこそ、くやしく侍れ。かゝる、いのちの程を知らで、行(く)末長くのみ、思ひ侍りけること」

と、泣くく、わたり給ひぬ。宮は、とまり給ひて、いふ方なくおほし焦がれたり。

心地かき亂りて、<sup>①</sup>

湖月抄

柏の心也  
こころち

源氏物語新釈

心ちかきみたりて 柏

まだ、<sup>②</sup>ことも果てぬに、まかで給ひぬるまゝに、いといたく惑ひて、

河海抄

またこともはてぬにまかて給ぬるまゝにいといたくまとひて 明順<sup>①</sup>

奉咒咀後一條院之由御堂關白令聞給召明順直召問給明順歸家吐血死

云々 見榮花物語  
此等例歟

孟津抄

またこともはてぬにまかて給ぬるまゝに 明順奉呪咀後一條院之由<sup>①</sup>

御堂關白令聞給召明順皈家吐血死<sup>云々</sup>見榮花物語此等例也

岷江入楚

まかりぬるまゝにいといたくまとひて 河明順奉呪咀後一條院之由<sup>②</sup>

御堂關白聞給召明順直召問給明順歸家吐血死<sup>云々</sup>見榮花物語此等

例歟

源氏物語新釈

まとひて 醉まとう也

「例の、いと、おどろくしき酔ひにもあらぬを、<sup>③</sup>

孟津抄

れいのいとおどろくしきゑひにもあらぬ 柏の上戸なるへしいま

はことに酔玉ふ也

岷江入楚

れいのおどろくしきゑひにもあらぬを 弄柏木・上戸なるへし今<sup>②</sup>

はことに酔給ふ也

私つねの酔ほとなきにかくあるを不審する也

湖月抄

柏木の心也  
例の

『つ、まし』と、物を思ひつるに、<sup>④</sup>

岷江入楚

つ、ましと物を思ひつるに 源の前にて臆してかくある歎心よはき

事と柏木の我と思ひしり給ふ也

湖月抄

つつましと物を思ひつるに 源の前にて臆してありけるが、心よ<sup>⑤</sup>

わき事と、柏木の我と思ひしり給ふ也。

氣の上りぬるにや、<sup>⑤</sup>

河海抄

けのほりぬるにや 氣上歟

湖月抄

上氣也  
けのほりぬるにや、

源氏物語新釈

けのほり 氣

⑥ しばしの酔ひの惑ひにもあらざりけり。

弄花抄

ゑいにもあらぬ かしは木上戸なるへしいまはことに酔たまふと也

湖月抄

しばし致仕也のゑひのまとひにもあらざりけり。

源氏物語新釈

しはしのゑひのまとひにも 下をいはんとていへり

⑦ おとゞ、は、北の方、

岷江入楚

おと、母北のかた 柏木の父母たち也

湖月抄

致仕大臣也  
おとゞ  
四君也

北の方

源氏物語新釈

おと、 致仕

は、北方 四君

⑧ 「よそくにて、いと、おほつかなし」とて、殿にわたしたてまつり給ふを、

一葉抄

殿にわたしたてまつり給を

一条宮落葉より柏木を父のかたへわた

し給也

弄花抄

よそくにて 一条宮落葉宮より柏木を致仕の大臣のかたへわたし給

細流抄

よそくにて 一条宮御方にましますをよひ給ふ也

孟津抄

よそくにて 落葉宮より柏を致仕の方へわたし給也

岷江入楚

よそくにて 一条宮御方にましますをよひ給ふ也 弄

とのにわたし 致仕の大臣のかたへ柏をよひとり給ふ

湖月抄

よそよそにていとおほつかなしとて殿に ⑨ 一條宮（落葉宮御方）

にましますを、よびよせたまふ也。⑩ 落葉宮より柏木を致仕のかた

へわたし給ふ也。

致仕のかたへ柏をよどり給ふなり  
殿にわたし奉り給ふを、

源氏物語新釈

殿にわたし奉り給を 致仕の方へ

④ 女宮のおほしたるさま、

一葉抄

女宮の 女二宮落葉

弄花抄

女宮のおほしたる 女二宮落葉事

細流抄

女宮 落葉宮也

孟津抄

女二宮のおほしたるさま 落葉

岷江入楚

女宮のおほしたる 必落葉宮也弄

湖月抄

女宮二落葉宮也

源氏物語新釈

女宮の 落葉

⑩ ことなくて

一葉抄

ことなくて 柏木の心也無事にて二宮にうちそひ奉りてもあるへき

をと也

湖月抄

柏木の心也  
ことなくて

源氏物語新釈

ことなくて

⑫ 古今に大かたに二三五過る月日はおもほえて花みてくらす春

そすくなき てふ心をとりにかけり、あひなたのみとは柏木の心さ

し深くもみえねと、さりとも末にはとのとりにおほせしをいふ、此

⑪ あひなは遮無也、はかなさのめといふに同し

心のどかにあいな頼みして、

細流抄

あひなのみ 此程は行末を思しに今は後悔也

岷江入楚

心のとかにあいなたのみし 必此程は行末を思ひしに今は後悔也

箋平生思ひたゆみしを後悔也

湖月抄

あひなだのみ 此程は行末を思ひしに、今は後悔也。行末長く

心ざしをも見え奉らんと、たのみてと也。

⑫ 「今は」と、別れたてまつるべき門出にや」と

孟津抄

今はとわかれ奉るへき 柏のなり

岷江入楚

わかれたてまつるへきかとしてにやと 私諸抄此引哥なし不及之歟

⑬ かりそめの行かひちとそ思ひこしいまはかきりのかとてなりけり

湖月抄

いまはと別れたてまつるべきかどでにやと 古「かりそめのゆきか

ひちとぞ思ひこし、今はかぎりのかどでなりけり」。

源氏物語新釈



今とは （八六〇） 古今かりそめの行かひちとそおもひこし今はかきりのかと

てなりけり

⑬ おくれておぼし嘆かむ事

孟津抄

をくれておほしなげかん 女二の事を柏の思ふ也

湖月抄

（孟女二の事、柏の思ふ也）  
おくれておほしなげかんこと

源氏物語新釈

おくれておほしなげかん 是は女二の御心をかしは木の思ふ也

⑭ かたじけなきを、「いみじ」と思ふ。

岷江入楚

かたじけなきをいみしと思ふ 柏・のこゝろ也 （本）

湖月抄

おそれがましと思宮なれば畏む心也  
かたじけなきを、

源氏物語新釈

⑮ かたじけなきを 常には深からねと今はと覺すにはかくも有へし

母御息所も、いと、いみじく嘆き給ひて、

一葉抄

は、宮す所 落葉宮の母也

弄花抄

は、宮す所 落葉宮母也

細流抄

は、宮す所 落葉の宮の母也

孟津抄

母みやす所もいとみしくなき給ひて 落葉母也

岷江入楚

母みやす所 落葉宮の母也 弄

湖月抄

（落葉の母なり）  
母御息所

源氏物語新釈

母宮すところも 落葉の御母

⑯ 「世のこと、して、

一葉抄

世のことくして 宮す所の詞也

弄花抄

世のこと、して 母御息所詞かしハ木にの給

細流抄

世のこと、して 柏木にの給ふ也

孟津抄

世のこと、して 母宮す所の柏にの給ふ詞也

岷江入楚

世のこと、して 柏木にの給ふ也 弄母御息所ノ詞世間のならひとし

て父母の事は勿論なからかやうの病気などの時は夫婦の間こそ心安くてはなれ給はぬこそ常の事なれと也

湖月抄

〔孟母す所の柏木のなまふ詞也〕  
「よのこととして」

源氏物語新釈

母みやす所の柏木のなまふ  
よのこととして

世中の常のことさまをいふ

かゝる御なからひは、

湖月抄

かかる御なからひは ㊦親達より、夫婦の中は、かやうの病中など

にも、心やすくは、なれ給はぬこそよのつねの習ひなれと也。柏木

の親のもとへ参り給ふをとどめ申し給ふ詞也。 抄同義。

例のことなれ。

孟津抄

れいのことなれ 御息所の詞也

平らかに物したまふまで

湖月抄

たいらかに物し給ふまで 平癒し給ふまでも、親の御もとに別れ居

給はんは、こなたにて心もとなく心づくしならんと也。

「ことほりや。」

弄花抄

ことほりや かしは木返事

細流抄

ことほりや 柏木の返事

孟津抄

ことほりや 柏の返事也

岷江入楚

ことほりや 秘柏木の返事弄

菱柏木ノ心聞同之又草子地歟 也

私柏木ノ心然へき也

湖月抄

〔三柏木の也〕  
「ことほりや。」

源氏物語新釈

ことほりや 柏心

數ならぬ身にて、およびがたき

岷江入楚

數ならぬ身にて及かたき 柏木の事皇女にてましませはかく申給ふ

也

湖月抄

是より柏木の詞也  
かずならぬ身にて

源氏物語新釈

かすならぬ身にて 是より柏木の詞也

なまじひに許されたてまつりてさぶらふしるしには、

湖月抄

なまじひにゆるされ奉りてさぶらふしるしには、  
御位をゆるされたるしに也

源氏物語新釈

なましひに 皇女を

「長く世に侍りて、

岷江入楚

なかく世に侍て 皇女などをゆるさるゝからはせて長久に存命し

て官位をもきはめ人かすになりて御らんせられたきと思ふにかく存

命不定に成ぬれば柏の深切の志をもえあらはさしと也

湖月抄

なかく世に侍りて、  
久しく存命して也

すこし、人と等しくなるけぢめをもや、

湖月抄

すこし人とひとしくなるけぢめをもや 人なみに官位も高く成て見

せ申さんとこそ思へれと也。

源氏物語新釈

人とひとしくなるけちめ 官位を云

かくさへなり侍れば、

湖月抄

かくさへなりはべれば、  
おもき病者と成りて也

源氏物語新釈

かくさへなり侍れば おもき病

「深き心ざしをだに、

湖月抄

ふかき心ざしをだに 官位高く成る事はさておき、浅からぬ心の末

をも見せ果て侍らで、死なんにやと也。

ふかき心ざしをだに  
病の心よりして

源氏物語新釈

ふかき心ざしをだに 官位高くならんはおきて浅からぬ心の末をた

に見せはて奉らて終りなんと也

とまりがたき心地にも、え行きやるまじく

弄花抄

とまりかたき かしハ木命の事を云

えゆきやるましき 女宮を置てハ行やりかたきと也

細流抄

とまりかたき 柏木の命の事也

孟津抄

とまりかたき心ちにも 柏の我身はなからへかたきに女宮を、きて

致仕へは行うきと也

岷江入楚

と、まりかたき心ちにも 必柏木の命の事弄

命のとまらん事はかたき也

えゆきやるましく 弄女君をきてはえ行やりかたき也

私今生ニハ留リタク冥途ハえ行ヤラジト也

又心やすきはえ行やらしとおもしろき詞也

湖月抄

とまりがたき心ちにもえゆきやるまじく 〔五〕柏のわが身はながらへ

がたきにも女宮を置いて致仕へは行うきと也。〔五〕同義。【愚案】生と

まりがたき心ちにも、猶輪廻せられて、よみぢにもえゆきやるまじ

く思はるるとにや。〔五〕同義。

とまりがたき心ちにも、

源氏物語新釈

とまりかたき心ちにもえゆきやるまじき〔注〕 命はとまりかたけ

れと魂は爰にと、まりなんと也

又、母北の方、

弄花抄

母北方 かしは木母也

細流抄

または、きたのかた 柏木の母也

岷江入楚

又は、の北方 必柏木の母也弄

湖月抄

又母北の方、

源氏物語新釈

又母北方 柏木の母

〔などか、「まづ見えむ」とは、思ひ給ふまじき。

湖月抄

〔などか、まづみえんとは思ひ給ふまじき。

源氏物語新釈

なとかまつ 親に先

われは、心ちも、すこし例ならず、心細き時は、

孟津抄

われは心ちもすこしれいならず 柏の母の方よりの詞也一の愛子と

也

岷江入楚

れいならず心ほそき時 柏の母の例ならぬ時は先柏木をゆかしくた

のもしくも思ふ何とてをそくおはするそと也

あまたの中に、まづ、とり分きて、

湖月抄

あまたの中にまづとりわきて、

かく、いと、おぼつかなきこと」と、

湖月抄

かくいとおぼつかなきこと

源氏物語新釈

かくいとおほつかなき事と 女二宮におはしてわたり給はぬを恨み

給ふと也

又、いと、ことわりなり。

孟津抄

又いとことわりなり 柏心也

岷江入楚

又いとことわりなり 落葉の母御息所の、給ふかことわりなる故に

又ことわりやとかけり

湖月抄

又いとことわりなり 抄前に御息所のとめ給へる所に、ことわりや

とおもへれば、ここに又と也。

又いとことわりなり。  
正柏木の心也

源氏物語新釈

又いとことわりなり 前にみやす所のとめ給へる所にことわりやと

おもへれば、こゝに又と也

〔人より先なりけるけぢめにや、

河海抄

人よりさきに 致仕大臣の柏木は嫡子と云也

花鳥余情

人よりさきなりけるけぢめにや 衛門督は嫡子の心なり

一葉抄

人よりさきに 〔嫡子の事也〕 嫡子の也 柏木詞云々

弄花抄

人よりさきなりける かしハ木御嫡子なれハ也

細流抄

人よりさきなり 柏木嫡子也

孟津抄

人よりさきなりける 柏は致仕の嫡身也

岷江入楚

人よりさきなりける 必柏木は嫡子なれば也 弄花鳥致仕大臣の柏

木は嫡子也

湖月抄

人よりさきなりける  
〔嫡子嫡子也〕 〔人よりさきなりける

源氏物語新釈

人よりさきなりける 嫡子也

とりわきて、

岷江入楚

とりわきて 柏の母儀の別して愛子なる事を柏のいふ詞也

見えたてまつらざらむ、

源氏物語新釈

見え奉らさらん ま見え

〔今は〕と、頼みなく聞かせ給はゞ、

細流抄

いまはとたのみなく 落葉宮へ申給也

孟津抄

いまはとたのみなくきかせ給は、 女二へ柏詞也

岷江入楚

いまはとたのみなくきかせ給は、 必落葉宮へ申さる、也

湖月抄

今はとたのみなく  
〔一〕落葉宮へ申さる也

源氏物語新釈

今はとたのみなく 落は宮へのたまふ

あやしく、たゆく、おろかなる本性にて、

河海抄

あやしくたゆくおろかなる本上にて

タユシ 墮瀛記史

細流抄

たゆく たゆみたる也

孟津抄

あやしくたゆくをろかなる本上にて 墮瀛記史

岷江入楚

たゆくをろかなる本上 墮瀛記史

物の疎懶なる心歎こまくとみなき心也

湖月抄

〔一〕たゆみたる也〔二〕墮瀛タユシ也  
たゆくおろかなる本上にて、

源氏物語新釈

たゆく 物たゆくして疎かに侍りしと也

おろかなる 女二の

おろかにおぼさる、事

湖月抄

おろかにおぼさること  
〔二〕女二の御心におぼさる事也

泣くく、わたり給ひぬ。

弄花抄

なくくわたり給ぬ 致仕のかたへかしは木わたり給

孟津抄

なくくわたり給ひぬ 致仕へ柏也

岷江入楚

なくくわたり給ぬ 弄致仕のかたへ柏木わたり給

湖月抄

なくくわたり給ひぬ。  
〔三〕致仕へ柏の也

源氏物語新釈

なくくわたり給ひぬ 致仕へ

宮は、とまり給ひて、

孟津抄

宮はとまりて 女二也

岷江入楚

宮はとまり給て 落葉也

湖月抄

源氏物語新釈  
みやはとまり給ひて、

宮は 女二

46、補足資料

〈1〉②

『栄花物語』巻第八はつはな、大系(上) 283頁

かゝる程に帥殿の邊りより、若宮をうたて申思ひ給へるさまの事、この頃出で来て、いとさ、にくき事多かるべし。まことにしもあらざらめど、それにつけてもけしからぬ事ども出で来て、帥殿いと世中すゞろはしうおほし歎きけり。「明順が知る事なり」など、大殿にも召して仰せられて、「かくあるまじき心な持たりぞ。かく稚うおはしますとも、さべうて生れ給へらば、四天王守り奉り給らん。たゞのわれらだに、人の悪しうするに、はもはら死なぬわざなり。況やおぼろげの御果報にてこそ、人の言ひ思はん事によらせ給はめ、真人達は、かくては天の責を蒙りなん。我ともかくもいふべき事ならず」とばかり、御前に召して宣はせけるに、いといみじう恐しうかたじけなしと、畏まりて、ともかくもえ述べ申さでまかでにけり。その後やがて心地悪しうなりて、五六日ばかりありて死にけり。

〈2〉⑩

『古今集』巻第七賀歌、三五一番歌、大系 171頁

さだやすのみこの、きさいの宮の五十の賀たてまつ

りける御屏風に、さくらの花のちるしたに、人の花み  
たるかたかけるをよめる  
ふぢはらのおきかぜ

〈3〉⑫

『古今集』巻第十六哀傷歌、八六二番歌、大系 274頁

かひのくにあひしりて侍りける人とぶらはんとて  
まかりけるを、みちなかにてにはかにやまひをして  
いまいとなりにければ、よみて京にもてまかりて、  
は、にみせよといひて人につけて侍りけるうた

在原しげはる

〈4〉⑬

『大漢和辞典』補巻、大修館書店 182頁

【墮窟】ユゲおこたる。怠けて無力である。「文選、前漢、枚乘、七發」今

太子、膚色靡曼、四支委隨。筋骨挺解、血脈淫灌、手足墮窳。越女侍<sup>レ</sup>前、齊姬奉<sup>レ</sup>後。(注) 善曰、郭璞方言注曰、墮、解墮也。應劭漢書注曰、窳、弱也。

(補訂者、津島昭宏、令和五年十二月)

※『史記』の用例は未詳。参考までに『大漢和辞典』を掲げる。

47、病重き柏木、親もとに戻る。歳末に朱雀院の御賀が執り行れる 大系三卷四一七頁一六行〜四一八頁一五行

大成二卷二二〇頁五行〜二二二頁四行、別本集成九卷四六頁三行、吉沢新釈4卷119頁、全書4卷221頁、玉上評釈7卷503頁、全集4卷274頁、今泉現代語訳6卷203頁、集成5卷262頁、完訳6卷226頁・375頁、新大系3卷407頁、新編全集4卷283頁

大殿に待(ち)受け聞え給ひて、よろづに騒ぎ給ふ。さるは、たちまちにおどろくしき御心地のさまにもあらず、月ごろ、物などを、さらに参らざりけるに、いと、はかなき柑子などをだに、觸れ給はず、たゞ、やうく物に引き入る、やうに見え給ふ。さる、時の有職の、かく物し給へば、世(の)中、惜しみあたらしがりて、御とぶらひに参り給はぬ人なし。内(裏)よりも、院よりも、御とぶらひしばく聞えつ、いみじく惜しみ思し召したるにも、いと、しき親たちの御心のみ惑ふ。六條院にも、「いと、口惜しきわざなり」と、思し驚きて、御とぶらひに、たびくねんごろに、父おとにも聞え給ふ。大將は、まして、いとよき御中なれば、けぢかく物し給ひつ、いみじく嘆きありき給ふ。

御賀は、廿五日になりけり。かゝる、時のやんごとなき上達部の、おもく患ひ給ふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御ながらひの、嘆きしをれ給へる頃ほひにて、ものすさまじきやうなれど、つぎくに、とこほりつる事だにあるを、さてやまじきことなれば、いかでかは、思しとまらむ。女宮の御心のうちをぞ、いとほしく思ひ聞えさせ給ふ。例の、五十寺の御誦經、又、かのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

大殿

さるは、

湖月抄

湖月抄

致仕也  
大殿

草子也  
さるは、



いとゞ、はかなき柑子などをだに、

花鳥余情

いと、はかなきかうしなとをたに 〔上〕 榮花物語佐理病惱の事をいふに

たちはな一もきこしめしては御身にもと、めすとあり

孟津抄

いと、はかなきかうしなとを 柑子也

榮花物語佐理病惱の事をいふに橘一もきこしめしては御身にも

と、めすとなり

岷江入楚

いと、はかなきかうしなとをたに 花榮花物語佐理病惱の事をいふ

にたち花ひとつもきこしめしては御身にもと、めすといへり

柑子には毒なしと云々

湖月抄

かうじ 〔柑子也〕

源氏物語新釈

かうし 柑子

④ さる、時の有職の、かく物し給へば、

孟津抄

さる時のいふそくのかくものし給へは 有職也

湖月抄

いふそく 〔孟有職也〕

源氏物語新釈

いふそくの 有職

⑤ 内(裏)よりも、院よりも、

岷江入楚

内よりも院よりも ※項目のみ。

湖月抄

うちよりも 〔禁中也〕

院よりも、 〔朱紫也〕

源氏物語新釈

うちよりも 禁中

院よりも 朱さく

⑥ いとゞしき親たちの御心

細流抄

いと、しきおやたち 内よりも院よりもかく念ころにとふらひ給へ

るにつけていよいよおしくあたらしくおもひ給へる也

孟津抄

おやたちの御心 天下挙ておしむほどに父たちは何と思はるゝそと

也

岷江入楚

いと、しきおやたちの 内よりも院よりもねんころにとふらひ給へ

るにつけていよいよおしくあたらしく思ひ給へる也

湖月抄

いとどしきおやたちの ⑥内よりも院よりも、かく念ごろにとぶら

ひ給へるにつけて、いよいよをしくあたらしく思ひたまへる也

六條院にも、

岷江入楚

六条院にも 菱天下の爲におしき人と思ひ給ふ心は源の妙也致仕へ

もとふらひ給ふ也

「いと、口惜しきわざなり」

湖月抄

「三天下のためをしきと思ひ給ふ源の妙也」  
いと口をしきわざなり

源氏物語新釈

いと口をしき 公の爲にをしき人と思ひ給ふ也

父おとゞにも

湖月抄

柏木にもとふくめたり  
ちちおとゞにも

源氏物語新釈

ち、おと、にも 柏木にもとふくめたり

大將は、まして、

岷江入楚

大將はまして 夕霧は柏木と別してよき中なれば一入思ひなげき給

ふと也

湖月抄

夕霧也  
大將は

源氏物語新釈

大將は 夕霧

物し給ひつゝ、

湖月抄

見まひおはして也  
物し給ひつゝ、

源氏物語新釈

物し給て 見まひおはして

御賀は、廿五日になりけり。

一葉抄

廿五日 十二月の事也

弄花抄

御賀ハ廿五日に ※項目のみ。

岷江入楚

(二)シヨウ、ミセ  
御賀廿五日になりけり 菱朱雀の御賀十二月廿五日あまりかねて

あらましのこと／＼しきはかくある物也

私此御賀試楽ノ時ヲ委細書テ当日ヲ略ノカケル此故ニ当日ノ舞

ノ装束ヲ試楽ノ処ニアリトカケリ面白シ

湖月抄

御賀は廿五日 朱雀の御賀十二月廿五日也。此御賀試楽の時を委細

に書きて當日を略す、尤も面白し。されば當日の装束の色も、試樂の所に書き出せり。

### 源氏物語新釈

御賀は廿五日 朱さくの御賀十二月廿五日也、比御樂試樂の様を委しくして正日を略けり、よりてけふの装束の色めも試樂の所に書つ

⑬ やんごとなき上達部

### 岷江入楚

やんごとなき上達部 致仕の一つは愁歎の時分を云すこしかとある人の所身などの時は用捨あるへき事なれとも此御賀度々延引して年内余日なしと也

⑭ つぎくくに、とゞこほりつる

### 細流抄

つきく 月々也

### 岷江入楚

つきくにと、こほりつる 必月々也

私次々々然へき歟<sup>(也)</sup>

### 湖月抄

つきづつき<sup>(湖月月也)</sup>

⑮ いかでかは、思しとゞまらむ。

### 孟津抄

いかでかはおほしと、まらん 父おと、の前をおほしめせとも御賀の事なればせられたる也

### 湖月抄

いかでかは<sup>(御賀也)</sup>

### 源氏物語新釈

いかでかは 御賀

⑯ 女宮の御心のうちをぞ、

### 一葉抄

姫宮の御心のうちを 女三宮の御心を源氏のいとおしく思給也

### 弄花抄

ひめ宮の御心を 女三宮の事<sup>イ本</sup>女宮

### 細流抄

女宮の 女三宮也事外の大宮にてありつるゆへにかく障礙のある也

### 孟津抄

女宮の御心の中をそ\* 女三也

### 岷江入楚

女御の御心のうちをそ 必女三宮事外の大宮にてありつる故にかく

障導<sup>(也)</sup>ある也

聞女三の心中を源のおほす也 柏木の事もこまれる歟<sup>(也)</sup>

### 湖月抄

女宮の ⑰ 女三宮也。ことのほかの大營にてありつる故に、かく障

礙の有る也。●三宮の御ころを源氏いとをしく思ひ給ふなり。

一五五三也  
女宮の

源氏物語新釈

女宮 ひめ 柏の今はと有なれば女三の御下心を源の覺すなり

例の、五十寺の御誦經、又、かのおはします御寺にも、摩訶毘盧遮那の。

紫明抄

かのおはしますてらにもまかひるさなの

問曰物語のならひみな詞をのこさるをやいまこの巻のをはりかくの

ことし如何

答云言道斷の心のうちはと、むるかたなければ眞言秘密の摩訶毗盧遮那のことしといひはてたるにこそこの詞又ふかき心あるへし胎藏界闕伽觀の文にも無始無終極重罪苦忽然蕩除と待めり彌摩訶毗盧遮那のとはてたる心のうちこそそのちのよまでも心にくくたのもしけれ心あさささとよりもおくふかきおほつかなさにて侍なんかし、この一句を誦しておほくのつみをのそかしめ給へ

河海抄

例の五十寺の御すきやう又かのおはしますてらにもまかひるさなの

摩訶毗盧遮那 毘盧遮那 舍那如次配法報應三身取義七 天武天皇四

年始於諸寺誦經云々

② 李部王記云延長七年九月十七日左大臣諸息四人共於法性寺設五十賀

齋會其儀本堂毗盧遮那如來像云々

朱雀院五十の御賀なれば五十寺の御誦經ある也 是常例也摩訶毗盧

遮那は大日也彼西山の御寺五十寺隨一として大日の御誦經ありと云

也彼御寺の本尊大日たる由也をはりにのとまりたるうちまかせて

はめつらしき様なれとも心はきこえたるにや古今歌にもうつりもゆ

くか人の心のといへり同躰也の、字にて猶すゑの心こもる也此字め

つらしきにつきて紫明抄などにも様々の了見を加へたり皆以今案義

也不足信用也一説云五十寺一寺名也云々は亦謬説也且は一寺にては

五十御賀詮なきにや

花鳥余情

例の五十寺の御す經又かのおはしますてらにもまかひるさなの

天慶二年十二月貞信公六十賀太政官於④「六十寺」修誦誦永延二年三

月十四日法興院大入道六十賀公家今日修「誦」誦於六十寺」今案御

賀の時諸寺の誦誦は年齢の數を用る定る事なり五十御賀なれば五十

寺にて御す經ある也かのおはします寺は仁和寺の圓堂本尊金剛界大

日なるを云なり五十寺の御す經別ては又仁和寺の圓堂にて摩訶毘盧

舍那の御誦經ありとなり此卷の結語の詞奇特なりかのおはします寺

にもまかひるさなの御す法ありといふべきをかくかきたるなりかや

うの筆法莊子などの書にあひにたるなり

一葉抄

例の五十寺 花御賀の時諸寺の誦誦は年齢の數を用る定れる事也

五十の御賀なれハ五十寺にて御す経ある也

おハします御寺にも 仁和寺の事也彼寺の円堂本尊金剛界大日也摩

訶毘盧遮那仏則大日也故まかひるさなの御誦経有と也此卷の結語の  
詞奇特也ひるさなの御す法ありといふへきをかく詞をのこしたる筆

法莊子などの書に相似たると云<sup>々</sup>見花鳥

### 弄花抄

五十寺の コシツ 五十賀によれり

おハします御寺にも 仁和寺に准す仁和寺の円堂の本尊金剛界大日

也まかひるさなの注なと行給といふ心をのこしてのとハかり書とめ

たり

人の御心しらひとも入つ、 朱雀御出家の後なれハかハる事共也

※「若菜下」大系(3) 337頁の本文箇所の注。

(6) 後漢書列伝免氏伝

韓康字伯休京兆霸陵人常采藥名山売於長安市口不二価三十余年有女

子從康買葉康守価不移女子怒日公是韓伯那<sup>乃那語也</sup>声乃不二価乎

### 細流抄

五十寺 年の数也五十ヶ寺也

おハします御てら 仁和寺也

まかひるさなの 此結語古来さまくの説あり諸抄に見えたり不載

之 或云 後漢書逸民伝韓康伝公是韓伯休那といへる那の字同心と

云<sup>ミ</sup>所詮は此物語は発端と結句とをさまくにかへてかくへき造意

ありされはかく種々にかくへきとてかやうにかけるなるへし心はあ

らにはきこえ侍るにや

### 孟津抄

れの五十寺の御すきやう又かのおはしますてらにもまかひるさの

五十賀なれは五十寺にと也河海花鳥に委仁和寺の円堂の本尊金剛界  
大日也摩訶毗盧遮那の法なと行給といふ心を残してのとはかりかき  
とめたり

とめたり

後漢書韓伯休<sup>\*</sup>と云者野菜を売価を二にせず別人の売は少もそへぬ

を此韓伯休<sup>\*</sup>はおほく売ほとに人か拵て取て帰をみる人のそれは又韓

伯休<sup>\*</sup>と問之那はのと云心也

仁和寺にてせらる、事ならば真言の事にて有へきそと云也

彼寺の本尊は大日なれは摩訶毗盧遮那のと云也

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこゝろの

畔雲本には奥に詞をくはへたると也

花鳥説相違也

親密近衛 近衛をみかさ山兵衛を柏木など読哥枕に書付たるも堤中納言宰相中

将より中納言になりて賭弓のかへりあるしの日故

郷のみかさの山は遠けれど、よみ土御門中納言兵衛佐なる時をはか

しは木のもりにし物をとよみたるよりさきに此御笠山柏木万葉にも

古今にも近衛兵衛の本文愚眼<sup>ハ</sup>みをよひ侍らねとやかてこれらより

思つて各申事にやとそ

### 岷江入楚

れの五十寺の御誦經又かのおはします御てらにもまかひるさなの  
必五十寺五十ヶ寺也年ノ數もおはします寺は仁和寺也

河摩訶毘盧遮那毘盧遮那舍那・次配法報応玄義七取意

天武天皇四年始於諸寺誦經云々

李部王記云延長七年九月十七日左大臣諸息四人共於法性寺設五十賀

齋会其儀本堂毗盧遮那如来像云々

朱雀院五十の御賀なれば五十寺の御誦經ある也是常例也摩訶毘盧遮  
那は大日也彼西山(ニシ)の御寺五十寺の随一として大日の御誦經ありと

いふ也彼御寺の御本尊大日なるよし也をはりにのとまりたる打ま  
かせてはめつらしき様なれとも心はきこえたるにや古今哥にもうつ  
りもゆくか人の心のといへり同躰也のノ字にて猶末の心こもる也此  
字めつらしきにつきて紫明抄などにも様々の了見をくはへたり皆以  
今案義也 不足信用

一説云五十寺 一寺の名也云々は又異説也一寺にては五十の御賀の  
詮なきにや

花天慶二年十二月貞信公六十賀(五)大政官於六十寺修誦誦永延二年三月  
十四日法興院大入道六十賀公家今日修誦誦於十寺

今案御賀の時諸寺之誦誦は年齢の數を用る定れる事也五十の御賀な  
れば五十寺にて御誦經ある也かのおはします寺は仁和寺の円堂本尊  
金剛界大日なるをいふ也五十寺の御誦經別ては又仁和寺円堂にて摩  
訶毘盧舍那の御誦經ありと也此結語の事奇妙也かのおはします寺

にもまかひるさなの御修法ありといふへきをかくかきたる也かやう  
の筆法莊子などの書に相似たる也

弄五十寺は五十の賀によれりおはします御寺は仁和寺二准す仁和寺  
の円堂本尊金剛界大日也まかひるさなの法なと行ひ給ふと心をのこ  
してのと書とめたり

此結語古来さまの説あり諸抄にみえたり不載之或云後漢書逸民  
伝韓康伝公是韓伯休那といへる那ノ字同心ト云々 所詮は此物語は  
発端と結語とをはこ(ハ)にかへて書へき造意ありされはかく種々に書  
へきとてかやうにかけるなるへし心はあらはにきこえ待(三)にや

吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこゝろの間韓伯休  
事吹まよふ野風をさむみ

此書と一躰をかけり

箋韓伯休力事商人也物ヲうるにわかいつたる程ならねはうらさる者  
也それを人のいふ事を承引せぬ事を韓伯休那といふ其那ノ字ノ文章  
也云々

又祈願ノ啓白ニ物神分ニ般若心經大般若經名・摩訶毘盧舍那など、  
いひて一つノ啓をうつすもまかひるさなといひて啓など打処にて  
書きたる歟ト云々

私惣しての義花鳥然へし結語の事いつれにてもきこえたる歟

如何

弄花興二注スル分

(卷) 〇二行付紙アリ口口時誤置之

・人の御心しらいとも入つ、

同韓伯休事

韓康字伯休京兆霸陵人常采藥名山売於長安市口不二価三十余年時有

女子徒康買藥康守価不朽女子怒日公是韓伯休那 那語余声乃乃賀反不

二価乎也

### 湖月抄

五十寺 〇年の數也。五ヶ寺也。天慶二年十二月貞信公六十賀

太政大臣於三十寺修二諷誦一、永延二年三月十四日法興院大入道

六十賀公家今日修諷誦於六十寺。今案御賀の時諸寺の諷誦は年齢

の數を用ひる、定れる事也、五十の御賀なれば五十寺にて御ず經あ

る也。

おはします御てら 〇仁和寺なり。仁和寺の圓堂、本尊ハ金剛界

大日なるを云ふ也。五十寺の御誦經別ては又仁和寺の圓堂にて摩訶

毘盧遮那の御誦經ありと也。〇摩訶毘盧遮那佛とは、すなはち大日

をいへり。大日經の題號をも大毘盧遮那神變ニ加持經と云ふ也。

〇此結語古來さまざまの説あり、諸妙に見えたり不載之。或云、

後漢書逸民傳韓康傳ニ公ハ是韓伯休那といへる那の字同心と云

云。所詮此物語は發端と結句とをさまざまにかへて書くべき造意あ

り、さればかく種種にかくべきとて、かやうにかけるなるべし、心

はあらはに聞え侍るにや。「吹まよふ野風を寒み秋萩の、うつりも

行くか人の心の」

朱雀のおはします仁和寺

おはします御寺にも、

### 源注拾遺

まかひるさなの 花鳥に摩訶毘盧遮那の御誦經ありとなり 今案ま

かひるしやなの法を修し給ふべし大日經はあらはに誦する經にはあ

らず又抄に大日經の題號を大毘盧遮那神變加持經とひかる神變の上

に成佛の二字落たり

### 源氏物語新釈

五十寺 御年のかすによりて四十寺にても五十寺も御誦經ある事い

つものこと也、例など引におよはず

おはします御てら 是を寛平のおはしましたるになぞらへて仁和寺

といふはさも有へし、又まかひるさなのと書るめたるはいと畧きた

る一つの文也、別に意有といふ説はわろし、且摩訶毗盧遮那の法を

修給ふなるへし、大日經は顯はに誦する經にはあらず、或説に是を

も御誦經といふはおほつかなしと契沖はいへり

### 源注余滴

おはします御寺にも

按摩訶毘盧遮那の法を修したまふなるべし大日經はあらはに誦する

經にはあらず抄に大日經の題號を大毘盧遮那神變加持經とひける神

變の上に成佛の字落たり〇雅望云岷江入楚に花鳥を引てかのおはし

ます寺にまかびるさなの御修法有といふべきをかく書たる也かやうの筆法莊子などの書に相似たる也とあり又「聞おはして祈願の啓白に般若心經大般若經名「摩訶毘盧舍那」などいひて一ツゞ啓をうつ是もまかびるさなといひて譬など打處にてかき、りたるぞ云々」とするせり是らみな強言也かきさしたる文なりとて「まかびるさなの」とのみにて筆をおくべきものはこゝ、はまた「此末一行虫はみて字のなくなりたるか又つぎ紙の糊はなれて末のかたうせたる成べし

## 47、補足資料

### 〈1〉③

『栄花物語』卷第二花山たづぬる中納言、大系(上) 95頁  
はじめは御惡阻つはりとて物もきこしめさざりけるに、月頃ごろすく過れど同じやうにつゆものきこしめさで、いみじう瘦せ細らせ給。いみじきわざにおぼして、よろづ手惑てまどひ、し残のこす事なく祈らせ給に、橘たちばなもきこしめしては御身にもとゞめず、あさましようあはれに心細ほそげにのみ見えさせ給へば、父との、胸むねふたがりて、安やすからずうち歎なげきつ、扱あつかひきこえ給。

※藤原低子懐妊の記事。なお花鳥余情が「佐理病悩の事」とするのは、低子の母が佐理の妹のためか。

### 〈2〉⑱

『吏部王記』延長七年九月十七日、史料纂集 33頁

それを後にうつせる人のおのれ補ひかくべきにあらねばそのまゝ、を寫しおきたるを抄どもに様々にいへるならんすでに鈴虫の巻のをはりに「六條院にも、ろ心にいそぎ給ひて御八講などおこなはせ給ふ」とぞいへる詞かけてなき本も今世には此例にてまたくつぎ紙のはなれてなくなりたる事しるし大和物語のゐるの下紐をかける處に「それに水くむ女なども有然いふやう」と書きしたるを注せるもの、「例の筆法なり」など書るは誤り也これもつぎ紙の落うせたる也

十七日、左大臣(藤原忠平)息四人、共於法性寺設五十賀齋會、其儀、本堂毗盧遮

那像前安置銀藥師如來像、安置六角佛殿、内畫藥師淨土、外金時繪、殿頂安水精火炎珠、當戶懸兩金花鬘代、殿角葺形懸金幡、七僧、講師尊意、讀師仁觀・咒願基繼僧都・三禮蓮舟・唄才准・散花奏舞・堂達良壇、各送法服、五十僧自大門引入堂、群卿・大夫皆在禮堂、大娘宮君諷誦、沙金百兩納銀壺、裏青朽葉清紗、付五葉松枝、中宮職調布二百端、後院御息所調布百端、按察大納言(藤原仲平)・左衛門督各百端、右近權中將實賴朝臣錢十貫、中君調布二百端、右兵衛佐師輔朝臣信濃布百端、師氏朝臣調布二百端、各諷誦了、名香以青朽葉羅裏、中宮御誦經使亮(藤原)元方朝臣、(藤原)略記案

### 〈3〉⑱

(ワ西宮記文?)  
(ワ西宮記文?)



『古今集』卷第十五恋歌五、七八一番歌、大系 255頁

題しらず 雲林院のみこ常康親王 仁明御子

吹きまよふ野風をさむみ 秋はぎのうつりもゆくか 人の心の

〈4〉 ⑰

『日本紀略』後篇二、天慶二年十二月十三日、国史大系第11卷 39頁

十三日己酉。太政官修<sup>思平</sup>諷誦於六十寺。賀<sup>思平</sup>太政大臣六十筭也。

〈5〉 ⑰

『小右記』永延二年三月十六日、大日本古記録(1) 139～140頁

傳聞、<sup>(攝政家)</sup>攝政御賀法性寺奉仕云々、

<sup>〔也〕</sup>十六日、关西、今日攝政家政所於法性寺書寫墨字壽命經六十卷、請六十口僧、

賀六旬筭、兩三公卿被參入云々、未得恠説、

〈6〉 ⑰

『後漢書』列伝七、逸民列伝第七十三、岩波書店 563～564頁

韓康<sup>かんこう あざな はくもゆう</sup>字は伯休<sup>はくしゅう</sup>、一名は恬休<sup>てんしゅう</sup>、京兆霸陵の人なり。家は世々著姓なり。

常に薬を名山に采<sup>と</sup>りて長安の市にて売り、口<sup>と</sup>に価を二にせざる<sup>か</sup>こと三十余年。時に女子有<sup>と</sup>つて康<sup>よ</sup>従り薬を買い、康は価を守りて移らず。女子怒<sup>と</sup>つて

曰わく、「公は是れ韓伯休なるぞ那<sup>な</sup>。乃ち価を二にせざる乎<sup>か</sup>」。

韓康字伯休、一名恬休、京兆霸陵人、家世著姓、常采薬名山、賣於長

安市、口不二價、三十餘年、時有女子従康買薬、康守價不移、女子怒曰、

公是韓伯休那、乃不二價乎、

公是韓伯休那、乃不二價乎、

(補訂者、津島昭宏、令和五年十二月)